

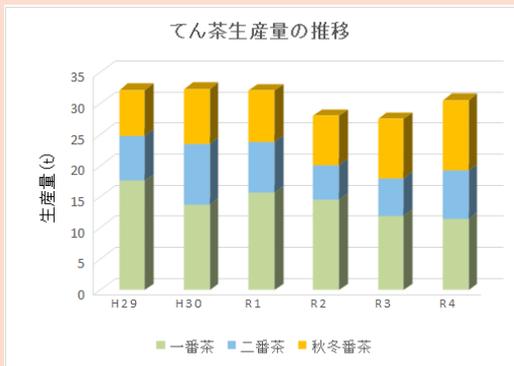
- 浜松市天竜地域は良質茶の産地であるが、リーフ茶需要の縮小とともに、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、栽培面積・生産量が減少している。新たな需要への対応のため、**てん茶や有機茶の生産強化が課題**である。
- 茶葉摘採期の分散や色沢不良の改善、秋てん茶生産対策等の**てん茶生産の課題解決**とともに、有機茶を生産する**新規就農者の支援**を行った。
- **てん茶**は、令和2年度に大きく減少したが、令和4年度は平成29年度(コロナ前)の**95%の生産量を確保し**、**有機茶も栽培面積を維持**している。今後、**てん茶加工設備の増設などによる生産拡大が検討**されている。

具体的な成果

1 てん茶の生産強化と品質改善

- ア てん茶の摘採期集中の緩和
 - 春整枝を栽培茶園の一部で導入し、萌芽期を分散させることで、てん茶工場への搬入量の調整に活用
- イ てん茶の色沢改善
 - 生葉の葉色が向上が図られた施肥体系を生産現場に導入
- ウ 有機栽培の秋てん茶生産対策
 - 二番茶終了後のせん枝時期の検討により、炭そ病の発生抑制と生育のよい秋芽が確保され、有機栽培の秋てん茶生産が開始

てん茶生産量 (H29 → R4)
32.1t → 30.4t



2 有機茶の生産強化

- 新規就農者の有機茶の規模拡大や小売販売拡大が進展

有機茶栽培面積 (H29 → R4)
37.9ha → 38.2ha

普及指導員の活動

令和2年度

- てん茶の色沢不良の改善のため、実証ほを設置し、**施肥体系を見直し**(慣行の6月施肥を4月中旬に変更)

令和3・4年度

- 茶葉の摘採期を分散させ、てん茶工場の処理能力を超える生葉搬入を解消するため、実証ほを設置し、**整枝時期を検討**
- 良質な秋てん茶生産のため、生育のよい秋芽確保が可能な**せん枝方法を検討**

令和元年度～令和4年度

- 有機茶栽培を行う新規就農者に対し、巡回指導や販路拡大のための販売業者とのマッチング等**経営確立に向けた取組を支援**



新規就農者の茶園巡回

普及指導員だからできたこと

- ・ 普及指導員として生産現場が抱えるそれぞれの課題を把握し、専門技術と、生産現場の取組事例や研究機関の研究成果等の知見を生かし、技術実証により現場の課題解決につなげることができた。

静岡県

持続可能な茶生産体制の強化と消費拡大等による天竜地域の活性化 ～てん茶・有機茶の生産強化の取り組み～

活動期間：令和元年度～令和4年度

1 取組の背景

- ・ 天竜地域は、浜松市の北部、天竜川上流域に位置する山間地で、茶の栽培に適した気象条件を活かし、味や香りに特徴のある良質茶を生産している。
- ・ 茶園は、小区画で、傾斜地が多く、乗用型摘採機の導入等による労働負荷軽減や規模拡大が困難で、個々の経営規模は他産地と比べ小さい。冷涼な気候と短い日照時間等により、下流域と比べ、摘採時期が遅く、収量が少ないなど、厳しい立地条件にある。
- ・ 一方で、気温が低く害虫の発生が比較的少ない、茶園が点在しているため他園からの農薬飛散の影響を受けにくいなどの条件を活かし、他産地との差別化を目指し、有機茶の栽培が行われてきた。また、抹茶の原料となるてん茶製造が2茶工場で行われている。
- ・ 緑茶の需要は、リーフ茶で減少し、荒茶価格は低下している。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、生産量・栽培面積は減少している。リーフ茶の需要が縮小する中、抹茶・粉末茶や有機茶等、新たな需要への対応が必要となった。このため、地域茶業の担い手や優良茶園の確保などとともに、てん茶や有機茶の生産強化の取組が課題となった。

2 活動内容（詳細）

(1) 「てん茶の生産強化と品質改善」

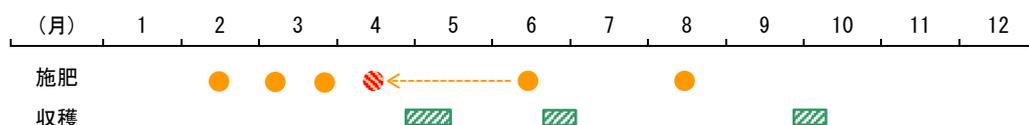
天竜地域内で、てん茶製造を行い拡大意向がある2茶工場に対し、てん茶生産強化に向けた取組を支援した。

ア てん茶の摘採期集中の緩和 <令和3・4年度>

- ・ 地域のてん茶用生葉の生産拡大により、摘採ピーク時に、処理能力を超える生葉搬入があり、その解消が課題となった。摘採ピークに、摘採制限を行うため、刈り遅れの発生によるてん茶品質の低下が懸念された。このため、茶葉の摘採期を分散させるため、整枝時期の検討を行った。

イ てん茶の色沢改善 <令和2年度>

- ・ てん茶の品質評価に大きく関係する色沢不良の改善のため、施肥体系の見直しによる色沢向上効果について、検討を行った。慣行の6月施肥を4月中旬に変更した施肥体系を検討した。



ウ 有機栽培の秋てん茶生産対策 <令和3・4年度>

- ・ 輸出への対応のため、良質な秋てん茶の生産が求められる一方で、有機栽培では、夏秋期の炭そ病の発生が課題となる。そのため、二番茶摘採後、炭そ病に罹病しやすい梅雨時期に、せん枝による葉の除去が行われる。
- ・ せん枝の時期や程度が、秋芽の生育に影響することから、良質な秋てん茶生産のため、生育のよい秋芽の確保が可能なせん枝方法を検討した。

(2) 「有機茶の生産強化」

ア 新規就農者等の活動支援

<平成30年度～令和4年度>

- ・ 有機茶栽培を行う製茶組合において研修を行った新規就農者に対し、就農計画の策定支援や巡回指導等を通じ、経営確立に向けた支援を行った。



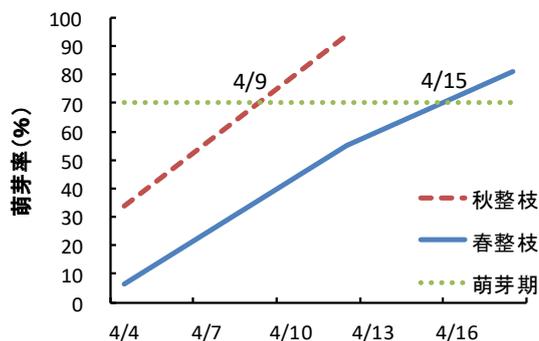
新規就農者の茶園巡回

3. 具体的な成果 (詳細)

(1) 「てん茶の生産強化と品質改善」

ア てん茶の摘採期集中の緩和 <令和3・4年度>

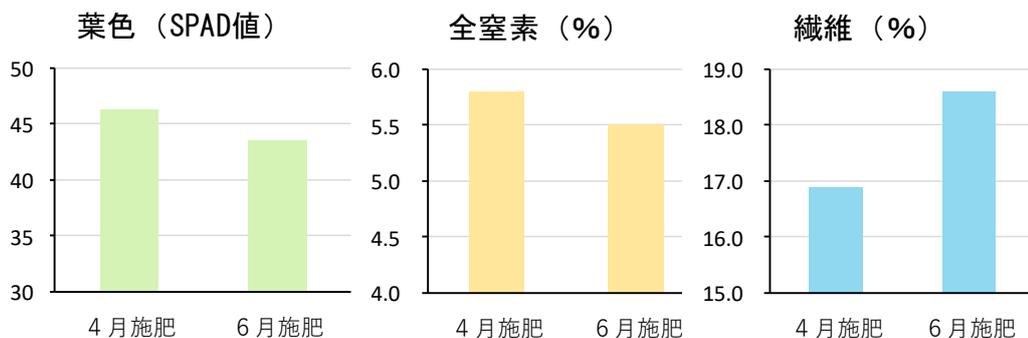
- ・ 通常は、秋(10月)に行う整枝を春(3月末)に行うことで、6日程度、新芽の萌芽が遅れた。春整枝は、新芽の萌芽が不揃いとなるが、てん茶品質の低下などの影響は少ないことを確認した。
- ・ 春整枝を栽培茶園の一部で導入し、萌芽期を分散させ、てん茶工場の搬入量の調整に活用している。



整枝時期による萌芽期の違い

イ てん茶の色沢改善 <令和2年度>

- ・ 6月施肥を4月施肥に変更した施肥体系により、生葉の葉色の向上が図られ、生産現場の施肥設計に導入した。



ウ 有機栽培の秋てん茶の生産対策 <令和3・4年度>

- せん枝を7月上旬に行うことで、生育のよい秋芽が確保され、炭そ病の発生も抑制することができた。
- 令和4年度から、茶商を通じて秋てん茶の南米等への輸出が行われており、有機栽培秋てん茶の継続に向け、現地での取組拡大を進めている。

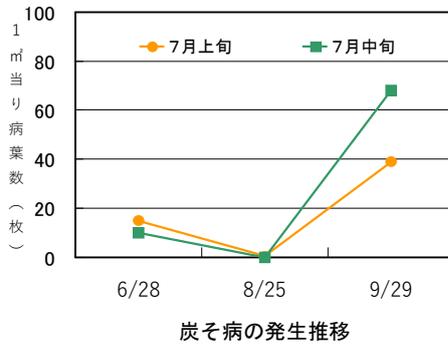


表 秋芽の生育調査結果

せん枝位置*	せん枝時期	芽長 (mm)	葉数 (枚)	分枝数 (本/20cm 枠)
下3cm (株面に葉が少し残る)	7月上旬	95.6	5.4	20.3
	7月中旬	83.0	4.0	14.6
下7cm (葉がほとんど残らない)	7月上旬	134.0	6.1	15.5
	7月中旬	148.3	5.4	14.7

* 一番茶摘採位置からの深さ

(2) 「有機茶の生産強化」

ア 新規就農者の活動支援 <令和元年度～令和4年度>

- 令和元年から新規就農者1名が経営を開始し、有機栽培茶の規模拡大を進めている。関係機関と連携し、茶販売業者等との個別マッチングや商談会出展などの販路拡大の取組を支援している。
- 高齢化と担い手の不足が進む中、当該製茶組合における担い手の確保につながっている。

4. 農家等からの評価・コメント (浜松市天竜区A氏)

- 春整枝を一部茶園で導入したことで、収穫時期を分散させることができるようになった。刈り遅れがなくなり、適期での収穫が可能になったことで、てん茶品質の向上にもつながった。
- てん茶の高い需要に対応していくため、今後も春整枝の取組を継続しつつ、規模拡大を進め、処理能力の向上のための施設整備も検討していきたい。

5. 普及指導員のコメント

(西部農林事務所天竜農林局地域振興課 主査 河合美絵)

- 茶業情勢の低迷が続く中においても、てん茶・有機茶の需要は高く、生産者の意欲も高い。需要に対応した生産を可能とするため、普及指導員として生産現場が抱えるそれぞれの課題を把握し、技術実証により現場の課題解決につなげることができた。

6. 現状・今後の展開等

- 天竜地域の茶業は、現在も販売不振とコロナ禍の影響を大きく受け厳しい状況にある。また、山間地という立地条件に起因した課題も多い。しかし、

一方で、その山間地の特徴を生かして、早くからてん茶や有機茶の生産により、販路の確保に取り組んできた。

- てん茶の生産量は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、令和2年度に大きく減少したが、令和4年度は平成29年度の95%に回復している。有機茶栽培面積は、天竜地域全体では、横ばいで推移し、平成29年度の栽培面積が維持されている。
- 今後も、海外等で有機栽培等の抹茶・粉末茶の需要拡大が見込まれる中、てん茶・有機茶を地域茶業の柱の一つとして位置づけ、てん茶の生産拡大への対応や、輸出に向けた有機栽培秋てん茶生産などに取り組む産地・経営体を支援する。

